

春晝後刻

二十四

此雨は間もなく張れて、庭も山も青き天鷲絨に蝶  
花の刺繡ある霞を落した。何んの餘波やら、庵にも、  
座にも、袖にも、菜種の薰が染みたのである。

出家は、さて日が出口から、裏山の其の蛇の矢倉  
を案内しよう、と老寶やかに勧めたけれども、此の  
際、観音の御堂の背後へ通り越す心持はしなかつた  
ので、挨拶も後日を期して、散策子は、やがて庵を  
辞した。

差當り、出家の物語について、何んの思慮もなく、  
批評も出来ず、感想も陳べられなかつたので、言は  
れた事、話されただけを、不殘鶉呑みにして、天窗  
から詰込んで、胸が膨れるまでになつたから、獨り  
静に歩行きながら、消化して胃の腑に落ちつけよう  
と思つたから。

對手も出家だから仔細はあるまい、（然やうな

ら) が些と唐突であつたかも知れぬ。

處で、石段を背後にして、行手へ例の二階を置いて、吻と息をすすると

「轉寐に

と先づ口の裏で云つて見て、小首を傾けた。杖が邪魔なので腕の處へ揺り上げて、引包んだ其の袖と腕組をした。菜種の花道、幕の外の引込みには引立たない野郎姿。雨上りで照々と日が射すのに、薄く一面にねんばりした足許、こつて轉ばねば可い。

「戀しき人を見てしより

夢てふもの

は、

と一寸顔を上げて見ると、左の岨から椎の樹が横に出て居る。――遠くから視めると、これが石段の根を仕切る緑なので、――庵室は最う右手の背後になつた。

見たばかりで、すぐに又、

「夢と言へば、これ、自分も何んだか夢を見て居るやうだ。やがて目が覺めて、あゝ、轉寐だつたと思へば夢だが、此まゝ、覺めなければ夢ではなから

う。何時か聞いた事がある、狂人と眞人間は、唯時  
間の長短だけのもので、風が立つと時々波が荒れる  
やうに、誰でも一寸々々は狂氣だけれど、直ぐ、仄  
ぎになつて、のたり／＼かなで濟む。もしそれが靜  
まらないと、浮世の波に乗つかつて我々、ふら／  
＼と腦が搖れる、木靜まらんと欲すれども風やまず  
と來た日にや、船に酔ふ、其の浮世の波に浮んだ船  
に酔ふのが、立處に狂人なんだと。

危険々々。

ト來た日にや夢も又同一だらう。目が覺めるから、  
夢だけれど、いつまでも覺めなけりや、夢ぢやある  
まい。

夢になら戀人に逢へると極れば、こりや一層夢に  
してつて、世間で、誰其は？ と尋ねた時、はい、  
とか何んとか言つて、蝶々二つで、ひら／＼なんぞ  
は悟つたものだ。

庵室の客人なんざ、今聞いたやうだと、夢てふも  
のを頼み切りにしたのかな。―

と考へが道草の蝶に誘はれて、ふは／＼と玉の緒  
が菜の花ぞひに伸びた處を、風もないのに、颯とば

かり、横合から雪の腕、緋の襟で、つと爪尖を反らして足を踏伸ばした姿が、眞黒な馬に乗つて、蒼空を翻然と飛び、帽子の廂を掠めるばかり、大波を乗つて、一跨ぎに紅の虹を躍り越えたものがある。はたと、これに空想の前途を遮られて、驚いて心付くと、赤棟蛇のあとを過ぎて、機を織る婦人の小家も通り越して居たのであつた。

音はと思ふに、きりはたりする聲は聞えず、山越えた停車場の笛太鼓、大きな時計のセコンドの如く、胸に響いてトントンと鳴る。

筋向ひの垣根の際に、此方を待ち受けたものらしい、鍬を杖いて立つて、莞爾ついて、のつそりと親仁あり。

「はあ、もし今は歸らせえますかね。」

「や、先刻は。」

其その莞爾にこ々々ノの顔かほのまゝ、鋏くはを離はなした手てを揉もんで、  
 「何なんともハイ御ごしんせつに言いはつせえて下くだせえ  
 やして、お庇かけ様さまで、私わし、えれえ手柄てがらして禮れいを聞きいた  
 でござりやすよ。」

「別べつに迷惑めいわくにもならなかつたかい。」  
 と悠々いゆうとして云いつた時とき、少すくなからず風采ふうさいが立上たちあがつ  
 て見みえた。勿論もちろん、對手あひては件くだんの親仁おやぢだけれど。

「迷惑處めいわくするではござりましねえ、かさねノ、禮れいを  
 言いはれて、私わしてつが大ありがたく難有ありがたがられました。」

「ぢや、むだにならなかつたかい、お前まへさんが始しま  
 末つをしたんだね。」

「竹たけン尖さきで壓おさへつけてハイ、山やまの根ねつこさ藪やぶの中なか  
 へ棄すてたでござえます。女中ぢよちゆうたちが殺ころすなど言いふけ  
 え。」

「その方ほうが心持こころもちが可いい、命いのちを取とつたんだと、そん  
 なにせずともことの事ことを、私わたしが訴人そにんしたんだから、怨みうら

があれば、此方へ取付くかも分らずさ。」

「はゝはゝ、旦那様の前だが、矢張り好きではねえでがすな。奥に居た女中は、蛇がと聞いたゞけでアレソレ打騒いで戸障子へ當つたゞよ。」

私先づ庭口から入つて、其處さ縁側で案内して、それから臺所口に行つて彼方此方探索のした處、何が、お前様御勘考さ違はねえ、湯殿の西の隅に、ベいら／＼舌さあ吐いとるた。  
思つたより大うがした。

畜生め。われさ行水するだら蛙飛込む古池と云ふへ行けさ。化粧部屋覗きをつて白粉つけてどうしるだい。白鷺にでも押惚れたかと、ぐいとなやして動かさねえ。どうしべいな、長アくして思案のして居りや、遠くから足の尖を爪立つて、お殺しでない、打棄つておくれ、御新姐は病氣のせみで物事にしでなんねえから、と女中たちが口を揃へて云ふもんだでね、藝もねえ、殺生するにや當らねえでがすから、藪畳みへ潜らして退けました。

御新姐は、氣分が勝れねえとつて、二階に寝てござらしけえ。

今しがた小雨が降つて、お天氣が上ると、お前様、雨よりは大きい紅色の露がぼつたり／＼する、あの桃の木の下の許さ、背戸口から御新姐が、紫色の蝙蝠傘さして出てござつて、（爺やさん、今ほどは難有う。其の厭なものゝ居た事を、通りが／＼りに知らして下すつたお方は、巖殿の方へおいでなすつたと云ふが、未だお歸りになつた様子はないかい。）ツて聞かした。

（どうだかね、私、内方へ参つたは些との間だし、雨に駈出しても來さつしやらねえもんだで、未だ歸らつしやらねえでござえませう。それとも身輕でハイづん／＼行かつせえたもんだで、山越しに名越の方さ出さつしやつたかも知れましねえ、）言うたらばの。

（お見上げ申したら、よくお禮を申して下さいよ。） ツてよ。

其の溝さ飛越して、其路を、

垣の外の此方と同一通筋。

「ハイぶうらり／＼、谷戸の方へ、行かしつけ

え。」

と言ひかけて身體ごと、此の巖殿から檣原へ出口の方へ振向いた。身の舉動が仰山で、然も用ありげな素振たつたので、散策子もおなじく其方を。

歸途の渠には恰も前途に當る。

「それ見えるでがさ。の、彼處さ土手の上にござらつしやる。」

錦の帯を解いた様な、媚めかしい草の上、雨のあとの薄霞、山の裾に靉靄く中に一張の紫大ささ月輪の如く、はた葦の花束に似たるあり。紫羅傘と書いていちのはちの花、字の通りだと、それ美人の持物。

散策子は一目見て、早く既に其の霞の端の、ひた

／＼と來て膚に絡ふのを覺えた。

彼處と此方と、言ひ知らぬ、春の景色の繋がる中  
へ、蕨のやうな親仁の手、無骨な指で指して、

「彼處さ、それ、傘の陰に憩んでござる。は、

は、禮を聞かつせえ、待つてるだに。」

横よこに落おとした紫むらさきの傘かさには、あの紫苑しをんに來くる、黄金色ごがねいろの昆蟲こんちゅうの翼つばねの如ごとき、煌々きら／＼した日ひの光ひかりが射い込んで、草くさに輝かがやくばかりに見みえる。

其その蔭かげから、しなやかな裳もすそが、土手どての翠みどりを左右さいうへ残のこして、線せんもなしに、よろけ縞しまのお召縮緬めしちりめんで、嬌態しなよく仕切しきつたが、油あぶらのやうにとろりとした、雨あめのあとの路みちとの間あひだ、あるかなしに、細ほそい襷つまさき先さきが柔やわかくしつとりと、内端うちばに搔かい込んだ足袋たびで留とまつて、其處そこから襦袢じゆばんの友染いっせんが、豊ゆたかに膝ひざまで捌さばかれた。雪駄せつたは一ツ土つちに脱ぬいで、片足かたあしはしなやかに、草くさに曲まげて居ゐるのである。

前まへを通とほらうとして、我われにもあらず立淀たちよどんだ。散策さんさく子は、下衆げしう儕ばらと賭物かけものして、鬼おにが出る宇治橋うぢばしの夕暮ゆふぐれを、唯一騎たゞ、東ひがしへ打うたする思おもひがした。

恁かく近ちかづいた聲音あしおとは、件くだんの紫むらさきの傘かさを小楯こだてに、土手どてへかけて悠然いっぜんと臚おほろけに投なげた、艶えんにして凄すこい緋ひの袴はかまに、

小波寄する微な響きさへ與へなかつたにもかゝらず、此方は一ツ胴震ひをして、立直つて、我知らず肩を聳やかすと、杖をぐいと振つて、九字を切りかけて、束々と通つた。

路は、あはれ、鬼の脱いだ其の脊を跨がねばならぬほど狭いので、心から、一方は海の方へ、一方は檀原の山里へ、一方は來し方の巖殿になる、久能谷の此の出口は、恰も、ものゝ撞木の形。前は、一面の麥畠。

正面に、青麥に對した時、散策子の面は恰も酔へるが如きものであつた。

南無三寶聲がかゝつた。それ、言はぬことではない。

一散に遁げもならず、立停まつた渠は、馬の尾に油を塗つて置いて、驚掴みの掌を、迂り抜けなんだ

を口惜く思つたらう。

「私。」

と振返つて、

「ですかい、」と言ひつゝ一目見たのは、頭禿に齒豁なるものではなく、日の光射す紫のかげを籠めた俤は、几帳に宿る月の影、雲の鬢、簪の星、丹花の脣、芙蓉の眦、柳の腰を草に縊つて、鼓草の花に浮べる状、虚空にかゝつた装である。

白魚のやうな指が、一寸、紫紺の半襟を引き合はせると、美しい瞳が動いて、

「失禮を」

と唯莞爾する。

「はあ、」と言つた切、腰のまはり、遁げ路を見つて置くのである。

「貴下お呼び留め申しまして、」

とふつくりとした胸を上げると、やゝ凭れかゝつて土手に寝るやうにして居た姿を前へ。

「はあ、何、」

眞正直な顔をして、

「私ですか、」と空とぼける。

「貴下のやうなお姿だ、と聞きましたでございます。

先刻は、眞に御心配下さいまして、」

徐ら、雪のやうな白足袋で、脱ぎ棄てた雪駄を引寄せた時、友染は一層はら／＼と、模様の花が俤に立つて、ぱつと留南奇の薫がする。

美女は立直つて、

「お蔭様で災難を、」

と襟首を見せてつむりを下げた。

爾時獨 武者、杖をわきばさみ、兜を脱いで、

「え、何んですかな、」

と曖昧。

美女は親しげに笑ひかけて、

「ほ、私は最う災難と申します。災難ですわ、貴下。彼が座敷へでも入りますか、知らないで居て

御覽ごらんなさいまし、當分家たうぶんうちを明渡あけわたして、何處どこかへ參まゐらなければなりませんの。眞個ほんとうに然さうなりましたら、どうしませう。お庇様かけさまで助たすかりましてございますよ。難有ありがたう存ぞんじます。」

「それにしても、私わたしと極きめたのは、  
と思おもふことが思おもはず口くちへ出でた。」

是これは些ちと調子てうしはづれだったので、聞きき返かへすやうに、  
「え、」

「先刻の、あの青大將の事なんでせう。それにしても、よく私だと云ふのが分りましたね、驚きました。」

と棄鞭の遁構へで、駒の頭を立直すと、なほ打笑み、

「そりや知れますわ。こんな田舎ですもの。而して御覽の通り、人通りのない處ぢやありませんか。」

貴下のやうな方の出入は、今朝ツからお一人しかありませんもの。丁と存じて居りますよ。」

「では、あの爺さんにお聞きなすつて、」

「否、私ども石垣の前をお通りがりの時、二階から拜みました。」

「ぢやあ、私が青大將を見た時に、」

「貴下のお姿が楯におなり下さいましたから、爾時も、厭なものを見ないで済みました。」

と少し打傾いて懐しさう。

「ですが、貴女、」とうつかりいふ、

「はい？」

と促かすやうに言ひかけられて、八々と行詰つたらしく、杖をコツ／＼と瞬一ツ、脣を引緊めた。

追っかけて、

「何んでございますか、聞かして頂戴。」

と婉然とする。

慌て氣味に狼狽つきながら、

「貴女は、貴女は氣分が悪くつで寢ていらつしやるんだ、と云ふぢやありませんか。」

「あら、こんなに甲羅を干して居りますものを。」

「へい、」と、綱は目をニツて、あゝ我ながら

まづいことを言つた顔色。

美女は其の顔を差覗く風情して、瞳を斜めに衝と流しながら、華奢な掌を軽く頬に當てると、紅がひらりと搦む、腕の雪を拂ふ音、さら／＼と衣摺れして、

「眞個は、寢て居ましたの

」

「何んですツて、」  
と苦笑。

「でも爾時は寢て居やしませんの。貴下起きて居  
たんですよ。あら、」

と稍調子高に、  
「何を言つてるんだか分らないわねえ。」

馴々しく云ふと、急に胸を反らして、すつきりと  
した耳許を見せながら、顔を反向けて俯向いたが、  
其まゝ身體の平均を保つやうに、片足をうしろへ引  
いて、立直つて、  
「否、寢て居たんぢやなかつたんですけども、貴  
下のお姿を拜みますと、急に心持が悪くなつて、そ  
れから寢たんです。」

「これは酷い、酷いよ、貴女は。」  
棄て身に衝と寄り進んで、

「ぢや青大將の方が増だつたんだ。だのに、態々  
呼留めて、災難を免れたとまで事を誇大にして、禮  
なんぞおつしやつて、元來、私は餘計なお世話だと

おも 思つて、御婦人ばかりの御住居だと聞いたにつけても、愈々極が悪くつて、此處だつて、貴女、こそ／＼遁げて通らうとしたんぢやありませんか。それを大袈裟に禮を言つて、極を悪がらせた上に、姿とは何事です。幽霊ぢやあるまいし、心持を悪くする姿と云ふがありますか。圖體とか、状とか云ふものですよ。其の私の圖體を見て、心持が悪くなつたは些と烈しい。それがために寝たは、残酷ぢやありませんか。

い 要らんおせつかいを申上げたのが、見苦しかったら然うおつしやい。此お關所をあやまつて通して頂く。ー 勸進帳でも讀みませうか。それでいけなけりや仕方がない。元の巖殿へ引返して、山越で出奔する分の事です。ー  
と逆寄せの決心で、然う言つたのをキツカケに、どかと土手の草へ腰をかけたつもりで、負けまい氣の、魔ものゝ顔を見詰めて居たので、横ざまに落しつける筈の腰が据らず、床凡を、這つて、ずるりと大地へ。

「あら、お危あぶない。」  
と云いふが早はやいか、眩まぼゆいばかり目めの前まへへ、霞かすみを抜ぬけ  
た極ごく彩さい色しき。さそくに友いうぜん染せんの膝ひざを亂みだして、繕つくろひもなく  
はらりと折をりし敷しき、片かたて手てが踏ふみ抜ぬいた下げ駄た一まへツ前つほ壺ぼを  
押おして寄よ越こすと、扶たすけ起おこすつもりであらう、片かたて手てが  
薄うすいろ色いろの手はん巾けちごと、ひらめいて芬ぶんと薰かをつて、優やさしく男をとこ  
の背せにかゝつた。

南無観世音大菩薩

助けさせたまへと、

散策子は心の裏、陣備も身構もこれにて粉になる。

「お足袋が泥だらけになりました、直き其處でござんすから、一寸おいすがせ申ませう。お脱ぎ遊ばせな。」

と指をかけようとする爪尖を、慌しく引込ませるを拍子に體を引いて、今度は大丈夫に、背中を土手へ寝るばかり、ばたりと腰を懸ける。暖い草が、ちりげもとで赫とほてつて、汗びつしより、まつかな顔をして且つ目をきよろつかせながら、

「構はんです、横はんです、こんな足袋なんぞ。」

ヤレ又落語の前座が言ひさうなことを、とヒヤリとして、漸と瞳を定めて見ると、美女は刎飛んだ杖を拾つて、しなやかに兩手でついて、悠々と立つて居る。

羽織なしの引かけ帯、ゆるやかな裕の着こなしが、

いまの身みじろぎで、片前かたまへさ下りに友染いっせんの紅くれなゐ匂にほひこ  
ぼれて、水色みづいろ縮緬ちりめんの扱帯しじきの端はし、やゝずり下さがつた風情ふぜい  
さへ、杖ステッキには似合にあはないだけ、恰あたかも人質ひとじちに取とられた  
形かたち――可哀かはいや、お主しゆうの身みがはりに、戀こひの重荷おもにで  
へし折をれよう。

「眞個ほんとに濟すみませんでした。」

又また候先ぞろせんを越こして、

「私わたし、どうしたら可いいでせう。」

と思おもひ案あんずる目めを半なかば閉とぢて、屈託くつたくらしく、盲目めくら  
が歎息たんそくをするやうに、ものあはれな装よそほひして、

「うっかり飛とんだ事ことを申まを上げて、私わたし、そんなつも  
りで言いつたんぢやありませんわ。」

< 貴下あなたのお姿すがたを見て、それから心持こころもちが悪わるくな  
りましたつて、言通こたはらりの事ことが、もし眞個まったくなら、どう  
して口くちへ出だして言いへますもんですか。貴下あなたのお姿すがたを  
見みて、それから心持こころもちが悪わるく

再びふたゝ口くちの裏うらで繰返くりかへして見みて、

「おほゝ、まあ、大概たいがいお察さつし遊あそばして下くださいまし  
なね。」と樂らくにさし寄よつて、袖そでを土手どてへ敷しいて凭もた

れるやうにして並べた。春の草は、其肩あたりを翠に仕切つて、二人の裾は、足許なる麥畠に臨んだのである。

「然う云ふつもりで申上げたんでござんせんことは、よく分つてますぢやありませんか。」

「はい、」

「ね、貴下、」

「はい、」

と無意味に合點して頷くと、未だ心が濟まぬらし

く、

「言とがめをなすつてさ、眞個にお人が悪いよ。」  
と異に搦む。

聊か辯ぜざるべからず、と横に見向いて、

「人の悪いのは貴女でせう。私は何も言とがめなぞした覚えはない。心持が悪いとおつしやるからおつしやる通りに伺ひました。」

「そして、腹をお立てなすつたんですもの。」

「否、恐縮をしたまでです。」

「其處は貴下、お察し遊ばして下さる處ぢやありませんか。」

言の綾もございますわ。朝顔の葉を御覽なさいまし、表はあんなに薄つぺらなもんですが、裏はふつくりして居りますもの裏を聞いて下さいよ。」

「裏だと お待ちなさいよ。」

え、といきつきに目を瞑つて、仰向いて一呼吸について、

「心持が悪くなつた反對なんだから、私の姿を見ると、それから心持が善くなつた。――事になると、――可い加減になさい、馬鹿になすつて、――と極めつける。但し笑ひながら。」

清しい目で屹と見て、

「むづかしいのね？ どう言へば恚うおつしやつて、貴下、弱いものをおいぢめ遊ばすもんぢやないわ。私は煩つて居るんぢやありませんか。」

草に手をついて膝をずらし、

「お聞きなさいましょ、まあ、」  
と恍惚うつとりしたやうに笑えみをふく含む口許くちもとは、鐵漿かねをつけて  
居ゐはしまいかと思おもはれるほど、婀娜あなだめいたものであ  
つた。

「まあ、私わたしに、戀こひしい懐なつかしい方かたがあるとしませう  
ね。可ようござんすか

「

「戀しい懐しい方があつて、そしてどうしても逢へないで、夜も寐られないほどに思ひ詰めて、心も亂れゝば氣も狂ひさうになつて居りますものが、せめて肖たお方でもと思ふのに、此頃は恚うやつて此處等には東京からおいでなすつたらしいのも見えません處へ、何年ぶりか、幾月越か、フト然うらしい、肖た姿をお見受け申したとしましたら、貴下、」  
と手許に丈のびた影のある、土筆の根を摘み試み、

「爾時は、而して何んですか、切なくつて、あとで臥つたと申しますのに、爾時は、どんな心持でと言つて可いのでございませうね。」

矢張、あの、厭な心持になつて、と云ふほかはないではありませんか。それを申したんでございますよ。」

一言もなく　しばらくして、

「ぢや、然う云ふ方がおあんなさるんですね、」  
と僅に一方へ切抜けようとした。

「御存じの癖に。」

と、伏兵大いに起る。

「え、」

「御存じの癖に。」

「今お目にかゝつたばかり、お名も何も存じませ  
んのに、どうしてそんな事が分ります。」

うたゝ寐に戀しき人を見てしより、其の、みを、  
と云ふ名も知らぬではなかつたけれども、夢のいは  
れも聞きたさに。

「それでも、私が氣疾をして居ります事を御存じ  
のやうでしたわ。先刻、」

「それは、何、あの畑打ちの爺さんが、蛇をつか  
まへに行つた時に、貴女はお二階に、と言つて、一  
寸御様子を漏らしたゞけです。それも唯御氣分が悪  
いだけ。」

私の形を見て、お心持が悪くなつたなんぞつて事  
は、些とも話しませんから、知らう道理はないので

す。但禮をおつしやるかも知れんと云ふから、其奴は困つたと思ひましたけれども、此處を通らないぢや歸られませんか。お目にかゝるのぢやなかつたんで入るんだつけ。お目にかゝるのぢやなかつたんです。しかし私が知らないで、二階から御覽なすつたゞけは、そりや仕方がない。」

「まだ、あんな事をおつしやるよ。然うお疑ひなさるんなら申しませう。貴下、此のまあ麗かな、樹も、草も、血があれば湧くんでせう。朱の色した日の光にほか／＼と、土も人膚のやうに暖うござんす。竹があつても暗くなく、花に陰もありません。燃えるやうにちら／＼咲いて、水へ散つても朱塗の杯になつてゆる／＼流れませう。海も眞蒼な酒のやうで、空は、」

と白い掌を、膝に仰向けて打仰ぎ、

「緑の油のやう。とろ／＼と、曇もないのに淀んで居て、夢を見ないかと勧めるやうですわ。山の形も柔かな天鵝絨の、ふつくりした括枕に似て居ます。其方此方陽炎や、絲遊がたきしめた濃いたきものゝやいうに靡くでせう。雲雀は鳴かうとして居るんで

せう。鷺が、遠くの方で、低い處で、此方にも里がある、楽しいよ、と鳴いて居ます。何不足のない、申分のない、目を瞑れば直ぐにうと／＼と夢を見ますやうな、此の春の日中なんでもございますがね、貴下、これをどうお考へなさいませう。

「どうと言つて、」

と言に連れられた春の其の日中から、瞳を美女の姿にかへした。

「貴下は、どんなお心持がなさいませう、」

「お楽しみですか。」

「はあ、」  
「お嬉しうございますか。」

「はあ、」  
「お賑かでございますか。」

「貴女は？」

「私は心持が悪いのでございます、丁ど貴下のお姿を拜みました時のやうに、」

と言ひかけて吻と小さなといき、人質の彼の杖を、  
斜めに両手で膝へ取った。情の海に棹す姿。思はず  
腕組をして熟と見る。

「此の春の日の日中の心持を申しますのは、夢をお話するやうで、何んとも口へ出しては言へませぬのね。何うでせう、此のしんとして寂しいことは矢張、夢に賑かな處を見るやうではござんすまいか。二歳か三歳ぐらゐの時に、乳母の背中から見ました、祭禮の町のやうにも思はれます。

何爲か、秋の暮より今、此の方が心細いんですもの。それで居て汗が出ます、汗ぢやなくつて慥う、あの、暖かさで、心を絞り出されるやうですわ。苦しくもなく、切なくもなく、血を絞られるやうですわ。桑かな木の葉の尖で、骨を抜かれますやうではございませんか。こんな時には、肌が蕩けるのだつて言ひますが、私は何んだか、水になつて、其の溶けるのが消えて行きさうで涙が出ます、涙だつて、悲しいんぢやありません、然うかと言つて嬉しいんでもありません。

あの貴下、叱られて出る涙と慰められて出る涙と

ござんすのね。此の春の日に出来ますのは、其の慰め  
られて泣くんです。矢張悲しいんでせうかねえ。お  
なじ寂しさでも、秋の暮のは自然が寂しいので、春  
の日の寂しいのは、人が寂しいのではありませんか。

あゝ遣つて、田圃にちらほら見えます人も、秋の  
だと、しつかりして、てん／＼が景色の寂しさに  
負けないやうに、張合を持つて居るんでせう。見た  
處でも、しよんぼりした脚にも氣が入つて居るやう  
ですけど、今しがたは、すつかり魂を抜き取られ  
て、ふは／＼浮き上つて、あのまゝ、鳥か、蝶々に  
でもなりさうですね。心細いやうですね。

暖い、優しい、柔かな、すなほな風にさそはれて、  
鼓草の花が、ふつと、綿になつて消えるやうに魂が  
なりさうなんですもの。極樂と云ふものが、アノ確  
に目に見えて、而して死んで行くと同一心持なんで  
せう。

楽しいと知りつゝも、情ない、心細い、頼りのな  
い、悲しい事なんぢやありませんか。

而して涙が出ますのは、悲しくつて泣くんでせうか、甘えて泣くんでせうかねえ。

私はずた／＼に切られるやうで、胸を掻きむしられるやうで、そしてそれが痛くも痒くもなく、日當りへ桃の花が、はら／＼とこぼれるやうで、長閑で、麗で、美しくつて、其れで居て寂しくつて、雲のない空が頼りのないやうで、緑の野が砂原のやうで、前生の事のやうで、目の前の事のやうで、心の内が言ひたくつて、言はれなくつて、焦つたくつて、口惜くつて、いら／＼して、じり／＼して、其くせばツとして、うつとり地の底へ引込まれると申しますより、空へ抱き上げられる鹽梅の、何んとも言へない心持がして、それで寝ましたんですが、貴下、

小雨が晴れて日の照るやう、忽ち麗なおも／＼ちして、

「恚う申しても矢張お氣に障りますか。貴下のお姿を見て、心持が悪くなつたと言ひましたのを、未だ許しちや下さいませんか、おや、貴下何うなさいましたの。」

身動きもせず聞き澄んだ散策子の茫然とした目の前へ、紅白粉の烈しい流が眩い日の光で渦いて、くる／＼と廻つて居た。

「何んだか、私も變な心持になりました、あゝ、と掌で目を拂つて、

「で、其處でお休みになつて、

「はあ、」

「夢でも御覽になりましたか。」

思はず口へ出したが、言ひ直した、餘り唐突と心付いて、

「然う云ふお心持でうたゝ寐でもしましたら、どんな夢を見るでせうな。」

「矢張、貴下のお姿を見ますわ。」

「えゝ、」

「此處に恚うやつて居りますやうな。ほゝほゝ。と言ひ知らずあでやかなものである。」

「いや、串戯はよして、其の貴女、戀しい、慕は

しい、而してど、うしても、最う逢へない、とお言ひなすつた、其の方の事を御覽なさるでせうね。」

「其の貴下に肖た、」

「否さ、」

此處で顔を見合はせて、二人とも筆つて居た草を同時に棄てた。

「成程。寂としたもんですね、どうでせう、此の閑さは」

頂の松の中では、頻に目白が轉るのである。

「又此の櫃原と云ふんですか、山の裾がすく／＼出張つて、大きな怪物の土地の神が海の方へ向つて、天地に開いた口の、奥歯へ苗代田麥島などを、引銜へた形に見えます。谷戸の方は、恚う見た處、何んの影もなく、春の日が行渡つて、些と曇があればそれが霞のやうな、長閑な景色で居ながら、何んだか厭な心持の處ですね。」

美女は身を震はして、何故か嬉しさうに、

「あゝ、貴下も其の（厭な心持）をおつしやいましたよ。ぢや、もう私も其のお話をいたしましても差支へございませんのね。」

「可うございます。はゝゝはゝゝ。」

ト一寸更まつた容子をして、うしろ見られる趣で、其二階家の前から路が一畝り、矮い藁屋の、屋根にも葉にも一面の、椿の花の紅の中へ入つて、菜畠へ纔に顯れ、苗代田で又絶えて、遙かに山の裾の翠に添うて、濁つた灰汁の色をなして、ゆつたりと向う

へ通じて、左右から突出た山でとまる。檜原の奥深く、蒸し上るやうに低く霞の立つあたり、背中合せが停車場で、其の腹へ笛太鼓の、異様に響く音を籠めた。其處へ、遙かに瞳を通して、しばらく茫然とした風情であつた。

「然うですねえ、はじめは、まあ、心持、彼の邊からだらうと思ふんですわ、聲が聞えて來ましたのは、」

「何んの聲です？」

「はあ、私が臥りまして、枕に髪をこすりつけて、悶えて、あせつて、焦れて、つく／＼、口惜くつて、情なくつて、身がしびれるやうな、骨が溶けるやうな、心持で居た時でした。先刻の、あの雨の音、さあつと他愛なく軒へかゝつて通りましたのが、丁ど彼處あたりから降り出して來たやうに、寝て居て思はれたのでございます。

あの停車場の囃子の音に、何時か氣を取られて居

て、それだからでせう。今でも停車場の人ごみの上へだけは、細い雨がゝゝつて居るやうに思はれますもの。未だ何處にか雨氣が残つて居りますなら、向うの霞の中でせうと思ひますよ。

と、其細い、幽な、空を通るかと思ふ雨の中に、圖太い、底力のある、そして、さびのついた鹽辛聲を、腹の底から押出して、

（えゝ、えゝ、えゝ、何ひます。お話はお馴染の東 京世渡草、商人の假聲物真似。先づ神田邊の事でござりまして、えゝ、大家の店前にござります。夜のしら／＼明けに、小僧さんが門口を掃いて居りますると、納豆、納豆―  
と申して、情ない調子になつて、

（えゝ、お御酒を頂きましたが聲が續きません、助けて遣つておくんない。）  
と厭な聲が、流れ星のやうに、尾を曳いて響くんでございますの。

私は何んですか、悚然として寢床に足を締めました。しばらくして、又其の（えゝ、えゝ、）と云ふ變な聲が聞えるんです。今度は些と近くなつて。

それから段々あの檀原の家を向ひ合ひに、飛び／＼に、千鳥にかけて一軒一軒、何處でもおなじことを同一ところまで言つて、お錢をねだりませんでございませがね、暖い、ねんばりした雨も、其の門附の足と一緒に、向うへ寄つたり、此方へよつたり、ゆる／＼歩行いて來ますやうです。

其の納豆納豆　ー　と云ふのだの、東京と云ふのですの、店前だの、小僧が門口を掃いて居る處だと申しますのが、何んだか懐しい、兩親の事や、生れました處なんぞ、昔が思ひ出されまして、身體を煮られるやうな心持がして我慢が出来ないで、掻卷の襟へ喰ひついて、しつかり胸を抱いて、そして恍惚となつて居りますと、やがて、些と強く雨が來て當ります時、内の門へ參つたのでございます。

（えゝ、えゝ、えゝ、）

と言ひ出すぢやございませんか。

（お話しはお馴染みの東京世渡草、商人の假聲物真似。先づ神田邊の事でござりまして、えゝ、大家の店さきでござります。夜のしらゝあけに、小僧さんが門口を掃いて居りますと、納豆納豆　――）  
とだけ申して、

（えゝ、お御酒を頂きまして聲が續きません、助けて遣つておくんさい。）と一分一厘おなじことを、おなじ調子で云ふんですもの。私の門へ來ましたまでに、遠くから丁ど十三度聞いたのでございます。

「女中が直ぐに出なかつたんです。」

（ねえ、助けておくんなさいな、お御酒を頂いた  
もんだからね、聲が續かねえんで、えへ、えへ、）

厭な咳なんぞして、

（遣つておくんなさいよ、飲み過ぎて切ねえんで、  
助けておくんなさい、お願えだ。）

と言つて獨言のやうに、貴下、

（遣り切ねえや、）ツて、いけ太々しい容子つ  
たらないんですもの。其處らへ、ベツベツ唾をしつ  
かけて居さうですわ。

小錢の音をちやら／＼とさして、女中が出さうに  
しましたから、

（光かい、光や、）

と呼んで、二階の上り口へ來ましたのを、押留め  
るやうに、床の中から、

（何んだね、）

と自分でも些と尖々しく言つたんです。

(門附でございます。)

(藝人かい！)

(はい、)

ツて吃驚して居ました。

(不可いよ、遣つちや不可ない。)

藝人なら藝人らしく藝をして錢をお取り、と然う  
お言ひ。出来ないなら出来ないと言つて乞食をおし。  
なぜ又自分の藝が出来ないほど酒を呑んだ、と言つ  
てお遣り。いけ酒亞々々失禮ぢやないか。)

とむら／＼として、どうしたんですか、じり／＼  
胸が煮え返るやうで極めつけますと、竊と蹙音を忍  
んで、光やは、二階を下りましたつけ。

お恥しうございますわ。

甲高かつたさうで、よく下まで聞えたと見えます。  
表二階に居たんですから。

(何んだつて、)

と門口で喰つてかゝるやうな聲がしました。

枕をおさへて起上りますと、女中の聲で、御病氣  
なんだからと、こそ／＼云ふのが聞えました。

嘲るやうに、

（病人なら病人らしく死んだへ。治るもんなら治  
つたら可からう。何んだって愚圖ついて、煩つて居  
るんだ。）

と赭顔なのが白い齒を剥き出して云ふやうです。

はあ、そんな心持がしましたの。

（おほ、死んで見せようか、死ぬのが何も、）

とつゝと立つと、ふら／＼して床を放れて倒れまし  
た。段へ、裾を投げ出して、欄干につかまつた時、  
雨がさつと暗くなつて、私はひとりで泣いたんです。  
其れツ切、聲も聞えなくなつて、門附は何處へ参り  
ましたか。雨も上つて、又明日日が當りました。何  
んですかねえ、十文字に小兒を引背負つて跣足で歩  
行いて居る、四十恰好の、巖乗な、繪に描いた、赤  
鬼と言つた形のものゝやうに、今慙うやつてお話を  
します内も考へられます。女中に聞いたのでござ  
いませんにー

又最<sup>また</sup>う寢<sup>ね</sup>床<sup>どこ</sup>へ倒<sup>たふ</sup>れツ切<sup>きり</sup>になりませうかとも存<sup>ぞん</sup>じま  
したけれども、然<sup>さ</sup>うしたら氣<sup>き</sup>でも違<sup>ちが</sup>ひさうですから、  
ぶら／＼日<sup>ひ</sup>向<sup>なた</sup>へ出<sup>で</sup>て來<sup>き</sup>たんでございます。

否<sup>い</sup>え、はじめてお目<sup>め</sup>にかゝりました貴<sup>あなた</sup>下<sup>た</sup>に、こんな  
お話<sup>はなし</sup>を申<sup>ま</sup>上<sup>し</sup>げまして、最<sup>も</sup>う氣<sup>き</sup>が違<sup>ちが</sup>つて居<sup>を</sup>りますのか  
も分<sup>わか</sup>りませんが、  
と言<sup>い</sup>ひかけて、心<sup>こころ</sup>を籠<sup>こ</sup>めて見<sup>み</sup>詰<sup>つ</sup>めたらしい、目<sup>め</sup>の  
色<sup>いろ</sup>は美<sup>うつく</sup>しかつた。

「貴<sup>あなた</sup>下<sup>た</sup>、眞<sup>ほん</sup>個<sup>とう</sup>に未<sup>み</sup>來<sup>らい</sup>と云<sup>い</sup>ふものはありますもので  
ございませうか知<sup>し</sup>ら。」

「もしあるものと極<sup>きま</sup>りますなら、地<sup>ぢ</sup>獄<sup>じく</sup>でも極<sup>ごく</sup>樂<sup>らく</sup>で  
も構<sup>かま</sup>ひません。逢<sup>あ</sup>ひたい人<sup>ひと</sup>が其<sup>そこ</sup>處<sup>こ</sup>に居<sup>ゐ</sup>るんなら。さ  
つさと其<sup>そ</sup>處<sup>こ</sup>へ行<sup>ゆ</sup>けば宜<sup>よろ</sup>しいんですけれども、  
と土<sup>つ</sup>筆<sup>くし</sup>のたけの指<sup>ゆび</sup>白<sup>しろ</sup>う、又<sup>また</sup>うつゝなげに草<sup>くさ</sup>を摘<sup>つ</sup>み、

摘<sup>つ</sup>み、

「屹<sup>きつ</sup>と然<sup>さ</sup>うと極<sup>きま</sup>りませんから、もしか、死<sup>し</sup>んで其<sup>そ</sup>

れつ切りになつては情ないんですもの。其くらゐな  
ら、生きて居て思ひ惱んで、煩らつて、段々消えて  
行きます方が、幾干が増だと思ひます。忘れな  
い時までも、何時までも、  
と言ひ／＼抜き取つた草の葉をキリ／＼と白歯で  
噛んだ。

トタンに慌しく、男の膝越に衝とのばした袖の色  
も、帯の影も、緑の中に濃くなつて、活々として蓮  
葉なものいひ。

「いけないわ、人の悪い。」  
散策子は答へに窮して、實は草の上に位置も構は  
ず投出された、オリイブ色の上表紙に、とき色のり  
ボンで封のある、ノオトブツクを、つまさぐつて居  
たのを見たので。

「此方へ下さいよ、厭ですよ。」

と端へかけた手を手帳に控へて、麥畠へ眞正面。

話をわきへずらさうと、青天白日に身構へつゝ、

「歌がお出来なさいましたか。」

「ほゝほゝ、」

と唯笑ふ。

「繪をお描きになるんですか。」

「ほゝほゝ。」

「結構ですな、お楽しみですね、些と拜見いたし

たいもんです。」

手を放したが、附着いた肩も退けないで、

「お見せ申しませうかね。」

あどけない状で笑ひながら、持直してぱら／＼と

男の帯のあたりへ開く。手帳の枚頁は、此の人の手

に恰も蝶の翼を重ねたやうであつたが、鉛筆で描い

たのは

ひとめ 一目見て散策子は蒼くなつた。

大小濃薄亂雑に、半ばかきさしたのもあり、歪んだのもあり、震へたのもあり、やめたのもあるが、とばかり。

「ね、上手でせう。此處等の人達は、貴下、玉脇では、繪を描くと申しますとさ。此の土手へ出ちゃ、何時までも恚うして居ますのに、唯居ては、谷戸口の番人のやうでをかしうござんすから、いつかつからはじめたんですわ。

大層評判が宜しうございますから 何ですよ、此頃に繪具を持出して、草の上で風流の店びらきをしようと思ひます、大した寫生ぢやありませんか。

此の圓いのが海、此の三角が山、此の四角いのが田圃だと思へばそれでもようござんす。それからい顔にして、い胴にしてに坐つて居る、今戸焼の姉様だと思へばそれでも可うございます、袴を穿

いた殿様だと思へばそれでも可いでせう。

それから 水中に物あり、筆者に問へば  
知らずと答ふと、高慢な顔色をしても可いんですし、  
名を知らない死んだ人の戒名だと思つて拜んでも可  
いんですよ。」

やう／＼聲が出て、

「戒名、」

と口が利ける。

「何、何んと云ふんです。」

「四角院圓々三角居士」と、

いひながら土手に胸をつけて、袖を草に、太脛の  
あたりまで、友染を敷亂して、すらりと片足片襪を  
泳がせながら、かう内へ掻込むやうにして、鉛筆で  
すら／＼と其の三體の祕密を記した。

テン／＼カラ、テンカラと、耳許に太鼓の音。二  
人の外に人のない世ではない。アノ椿の、燃え落ち

るやうに、向うの茅屋へ、續いてぼた／＼と溢れた  
と思ふと、菜種の路を葉がくれに、眞黄色な花の上  
へ、ひらりと彩つて出たものがある。

茅屋の軒へ、鶏が二羽舞上つたのかと思つた。

二個の頭、獅子頭、高いのと低いのと、後になり  
先になり、纏れる、狂ふ、花すれ、葉すれ、菜種に、  
と見るとやがて、足許から其方へ續く青麥の畠の端、  
玉脇の門の前へ、出て來た連獅子。

汚れた萌黄の裁着に、泥草鞋の乾いた埃も、霞が  
麥にかゝるやう、志して何處へ行く。早其の太鼓を  
打留めて、急足に近づいた。いづれも獅子の角兵  
衛大小。小さい方は八ツばかり、上は十三一  
四と見えたが、すぐに久能谷の出口を突切り、紅白  
の牡丹の花、はつと俤に立つばかり、ひらりと前を  
行き過ぎる。

「お待ち一寸、」  
と聲をかけて美女は起直つた。今の姿を其のまゝ

に、雪駄は獅子の蝶に飛ばして、土手の草に横坐りになる。

ト獅子は紅の切を捌いて、二つとも、立つて頭を向けた。

「あゝ、あの、兒たち、お待ちなね。」

テン／＼／＼、（大きい方が）トンと當てる  
と、太鼓の面に撥が飛んで、ぶる／＼と細に躍る。

「アリヤ」

小獅子は路へ橋に反つた、のけ様の頭ふつくりと、  
二かには目に紅を潮して、口許の可愛らしい、色の白  
い兒であつた。

三十四

「おほゝゝ、大層勉強するわねえ、まあ、お待ちよ。あれさ、そんなに苦しい思ひをして引くりかへらなくつても可いんだよ、可いんだよ。」

と壓へつけるやうに云ふと、ぴよいと立直つて頭の堆く大きく突出た、紅の花の廂の下に、くるツとした目を三つて立つた。

ブル／＼ツと、跡を引いて太鼓が止む。

美女は膝をずらしながら、帯に手をかけて、揺り上げたが、

「お待ちよ、今お錢を上るからね、」

手帳の紙へはしり書して、一枚手許へ引切つた、其のまゝ獅子をさし招いて、

「おいで／＼、あゝ、お前ね、これを持って、其の角の二階家へ行つて取つておいで。」

留守へ言ひつけた爲替と見える。

後馳せに散策子は袂へ手を突込んで、

「細いのならありますよ。」

「否、可うござんすよ、さあ、兄や、行つて来

な。

」

撥を片手で引つかむと、恐る／＼差出した手を素  
疾く引込め、とさかをはらりと振つて行く。

「さあ、お前此方へおいで、」

小さな方を膝許へ。

きよとんとして、ものも言はず、棒を呑んだ人形  
のやうな顔を、凝と見て、

「幾歳なの、」

「八歳でござえス。」

「母さんはないの、」

「角兵衛に、そんなものがあるもんか。」

「お前は知らないでもね、母様の方は知ってるか  
も知れないよ、」

と衝と手を袴越に白くかける、とぐいと引寄せて、  
横抱きに抱くと、獅子頭はぱくりと仰向けに地を拂  
つて、草鞋は高く反つた。鶏の羽の飾には、椰子の

葉を吹く風が渡る。

「貴下、」

と落着いて見返つて、

「私の兒かも知れないんですよ。」

トタンに、つるりと腕を這つて、獅子は、倒にト  
ンと返つて、ぶる／＼と身體をふつたが、けるりと  
して突立つた。

「えへ／＼／＼、」

此處へ勢よく兄獅子が引返して、

「頂いたい、頂いたい。」

二つばかり天窓を掉つたが、小さい方の背中を突  
いて、テンと又撥を當てる。

「可いよ、そんなことをしなくつても、」

と裳をずりおろすやうにして止めた顔と、未だ掴  
んだまゝの大きな銀貨とを互に見較べ、二個ともとば  
んとする。時に朱盆の口を開いて、眼を輝すものは

何。<sup>なに</sup>

「其の<sup>そ</sup>かはり、ことづけたいものがあるんだよ、  
待つて<sup>ま</sup>おくれ。」

と其の<sup>そ</sup>口を樂書<sup>らくがき</sup>の餘白<sup>よはく</sup>へ、鉛筆<sup>えんぴつ</sup>を眞直<sup>まつすぐ</sup>に取つ  
てすら／＼と春<sup>はる</sup>の水<sup>みづ</sup>の靡<sup>なび</sup>くさまに走<sup>はし</sup>らした假名<sup>か</sup>は、  
かくれもなく、散策子<sup>さんさくし</sup>に讀得<sup>よみえ</sup>られた。

君<sup>きみ</sup>とまたみるめおひせば四方<sup>よも</sup>の海<sup>うみ</sup>の

水<sup>みづ</sup>の底<sup>そこ</sup>をもかつき見<sup>み</sup>てまし

散策子<sup>さんさくし</sup>は思<sup>おも</sup>はず海<sup>うみ</sup>の方<sup>かた</sup>を屹<sup>きつ</sup>と見<sup>み</sup>た。波<sup>なみ</sup>は平<sup>たい</sup>かであ  
る。青麥<sup>あをむぎ</sup>につゞく紺青<sup>こんじやう</sup>の、水平線<sup>すいへいせん</sup>上<sup>じやう</sup>雪<sup>ゆき</sup>一山<sup>いつさん</sup>。

富士<sup>ふじ</sup>の影<sup>かげ</sup>が渚<sup>なぎさ</sup>を打<sup>う</sup>つて、ひた／＼と薄<sup>うす</sup>く被<sup>かぶ</sup>さる、  
藍色<sup>あゐいろ</sup>の西洋館<sup>せいやうくわん</sup>の棟高<sup>むねたか</sup>く、二三羽鳩<sup>ばはと</sup>が羽<sup>はね</sup>をのして、ゆ  
るく手巾<sup>はんけち</sup>を掉<sup>ふ</sup>り動<sup>うご</sup>かす状<sup>さま</sup>であつた。

小<sup>ちひ</sup>さく疊<sup>たゝ</sup>んで、幼<sup>をさな</sup>い方<sup>ほう</sup>の手<sup>て</sup>に其<sup>そ</sup>の（ことづけ）  
を渡<sup>わた</sup>すと、ふツくりした頤<sup>おとがひ</sup>で、合點<sup>がてん</sup>々々<sup>／＼</sup>をすると  
見<sup>み</sup>えたが、いきなり二階家<sup>にかいや</sup>の方<sup>ほう</sup>へ行<sup>ゆ</sup>かうとした。

使を頼まれたと思つたらしい。

「おい、其方へ行くんぢやない。」  
と立入つたが聲を懸けた。

美女は莞爾して、

「唯持つて行つてくれゝば可いの、何處へツて當  
はないの。落したら其處でよし、失くしたら其れツ  
切で可んだから  
唯心持だけなんだから

」

「ぢや、唯持つて行きや可いのかね、奥さん、」  
と聞いて頷くのを見て、年紀上だけに心得顔で、  
危つかしさうに仰向いて吃驚した風で居る幼い方の、  
獅子頭を背後へ引いて、

「こん中へ入れとくだア、奴、大事にして持つと  
んねえよ。」

獅子が並んでお辭儀をすると、すた／＼と駈け出  
した。後白浪に海の方、紅の母衣翩翩として、青麥  
の根に霞み行く。

さて半時ばかりの後、散策子の姿は、一人、彼處から鳩の舞ふのを見た、濱邊の藍色の西洋館の傍な、砂山の上に顕れた。

其處へ來ると、波打際までも行かないで、太く草臥れた状で、ぐったりと先づ足を投げて腰を卸す。どれ、貴女のために（ことづけ）の行方を見届けませう。連獅子のあとを追つて、と云ふのをしほに、未だ我儘が言ひ足りず、話相手の欲しかったらしい美女に辭して、袂を分つたが、獅子の飛ぶのに足の續くわけはない。

一先づ歸宅して寢轉ばうと思つたのであるが、久能谷を離れて街道を見ると、人の瀬を造つて、停車場へ押掛ける夥しさ。中には最う此處等から假聲をつかつて行く壯佼がある、淺黄の襦袢を膚脱で行く女房がある、其の演劇の恐しさ。大江山の段が何か知らず、逆も町へは寄附かれたものではない。

で、路と一緒に、人通の横を切つて、田圃を抜けて来たのである。

正面にくぎり正しい、雪白な霞を召した山の女王のましますばかり。見渡す限り海の色。濱に引上げた船や、畚や、馬秣のやうに散ばつたかじめの如き、いづれも海に對して、我は顔をするのではないから、固より馴れた目を遮りはせぬ。

且つ一人一人居なければ、眞晝の様な月夜とも想はれよう。長閑さはしかし野にも山にも増つて、あらゆる白砂の佛は、暖い霧に似て居る。

鳩は蒼空を舞ふのである。ゆつたりした浪にも誘はれず、風にも乗らず、同一處を――其の友は館の中に、こと／＼と塹を踏んで、くゝと啼く。

人は恚う云ふ處に、恚うして居ても、胸の雲霧の霽れぬ事は、寐られぬ衾と相違はない。

徒らに砂を握れば、くぼみもせず、高くもならず、

他愛なくほろ／＼と崩れると、又傍からもり添へる。  
水を掴むやうなもので、搜ればはら／＼とたゞ貝が  
出る。

渚には敷満ちたが、何んにも見えない處でも、纔  
に砂を分ければ貝がある。未だ此の他に、何が住ん  
で居ようも知れぬ。手の届く近い處が然うである。

水の底を搜したら、渠がためにこがれ死をしたと  
言ふ、久能谷の庵室の客も、其處に健在であらうも  
知れぬ。

否、健在ならばと云ふ心で、君と其みるめおひせ  
ば四方の海の、水の底へも潜らうと、（ことづけ）  
をしたのであらう。

此の歌は、平安朝に艶名一世を壓した、田かりけ  
る童に襖をかりて、あをかりしより思ひそめてき、  
とあこがれた情に感じて、奥へと言ひて呼び入れけ  
るとなむ  
名嬢の作と思ふ。

言ふまでもないが、手帳に此をしるした人は、御

堂の柱に、うたゝ寐の歌を樂書したとおなじ玉脇の妻、みを子である。

深く考ふるまでもなく、庵の客と玉脇の妻との間には、不可思議の感應で、夢の契があつたらしい。

男は眞先に世間外に、はた世間のあるのを知つて、空想をして實現せしめむがために、身を以つて直ちに幽冥に趣いたものゝやうであるが、婦人は未だ半信半疑で居るのは、それとなく胸中の鬱悶を漏らした、未來があるものと定り、靈魂の行末が極つたら、直ぐにあとを追はうと言つた、言の端にも顯れて居た。

唯其有耶無耶であるために、男のあとを追ひもならず、生長らへる效もないので。

そゞろに門附を怪しんで、冥土の使のやうに感じた如きは幾分か心が亂れて居る。意氣張づくで死んで見せよように到つては、益々惱亂のほどが思ひ遣られる。

又一面から見れば、門附が談話の中に、神田邊の店で、江戸紫の夜あけがた、小僧が門を掃いて居る、納豆の聲がしたのは、其の人が生涯の東雲頃であつたかも知れぬ。――やがて暴風雨となつたが――

兎に角、（ことづけ）は何うならう。玉脇の妻は、以て未來の有無を占はうとしたらしかつたに――頭陀袋にも納めず、帯にもつけず、袂にも入れず、角兵衛が其の獅子頭の中に、封じて去つたのも氣懸りになる。爲替してきらめくものを掴ませて、のつつ反ツつの苦愚を見せない、上花主のために、商賣冥利、随一大切な處へ、偶然受取つて行つたのであらうけれども。

あれがもし、鳥にでも攫はれたら、思ふ人は虚空にあり、と信じて、夫人は羽化して飛ぶであらうか。いや、羊が食ふまでも、角兵衛は再び引返して其音信は傳へまい。

従つて砂を崩せば、従つて手にたまつた、色々の

貝殻かひがらにフト目を留とめて、

君きみとまたみる目めおひせば四方よもの海うみの

と我われにもあらず口くちずさんだ。

更さらに答こたへぬ。もし又またうつせ貝がひが、大おほいなる水みづの心こころを語かたり得えるなら、渚なぎさに敷しいた、いさゝ貝がひの花吹雪はなふとぎは、いつも私語さくやきを絶たえせぬたらうに。されば幼兒をさなこが拾ひろつても、われらが砂すなから掘ほり出だしても、這このものは同おなじ一いちである。

小貝こがひを其處そこで捨すてた。

而さうして横よこざまに砂すなに倒たふれた。腰こしの下したはすぐになだれたけれども、迂すべり落おちても埋うもれはせぬ。

しばらくして、其その半眼はんがんに閉とぢた目めは、斜なめに鳴なき鶴つるヶ岬さきまで線せんを引ひいて、其その半なかばと思おもふ點てんへひら／＼と燃もえ立たつやうな、不知火しらぬひにはつきり覺さめた。

とそれは獅子頭しがしらの緋ひの母衣ほろであつた。

二人とも出て来た。濱は鳴鶴ヶ岬から、小坪の岨まで、人影一ツ見えぬ處へ。

ステインヨン  
停車場に演劇がある、町も村も引つぷるつて誰が角兵衛に取合はう。あはれ人の中のぼうふらのやうな忙しい稼業の兒たち、今日はおのづから閑なのである。

二人は此處でも後になり先になり、脚絆の足を入れ違ひに、頭を組んで白浪を被ぐばかり浪打際を歩行いたが、やがて其の大きい方は、五六尺渚を放れて、日影の如く散亂れた、かじめの中へ、草鞋を突出して休んだ。

小獅子は一層活發に、衝と浪を追ふ、颯と追はれる。其光景、ひとへに人の兒の戯れるやうには見えず、嘗て孤兒院の兒が此處に来て、一種の監督の下に、遊んだのを見たが、それとひとつで、浮世の浪に揉み立てられるかといぢらしい。

但其の頭の獅子が怒り狂つて、たけり戦ふ勢であ

る。

勝では可い！

ト草鞋を脱いで、跣足になつて横歩行をしはじめた。あしを濡らして遊んで居る。

大きい方は仰向けに母衣を敷いて、膝を小さな山形に寝た。

磯を横ツ飛の時は、其の草鞋を脱いだばかりであつたが、やがて脚絆を取つて、膝まで入つて、靜かに立つて居たと思ふと、引返して袴を脱いで、今度は衣類をまくつて腰までつかつて、二三度密と潮をはねたが、又ちよこ／＼と取つて返して、頭を勿退け、衣類を脱いで、丸裸になつて一文字に飛込んだ。陽氣はそれでも可かつたが、泳ぎは知らぬ兒と見える。唯勢よく、水を逆に刎ね返した。手でなぐつて、足で踏むを、海水は稻妻のやうに幼兒を包んで其の左右へ飛んだ。―― 雫ばかりの音もせず―― 獅子はひとへに嬰兒になつた、白光は頭を撫で、緑波は胸を抱いた。何等の寵兒ぞ、天地の大きな盪

で産湯を浴びるよ。

散策子はむくと起きて、ひそかに其の幸福を祝するのであつた。

あとで聞くと、小兒心にもあまりの嬉しさに、此一幅の春の海に對して、報恩の志であつたといふ。一旦出て、濱へ上つて、寝た獅子の肩の處へしやがんで居たが、對手が起返ると、濡れた身體に、頭だけ取つて獅子を被いだ。

それから更に水に入つた。些と出過たと思ふほど、分けられた波の脚は、二線長く廣く尾を引いて、小獅子の姿は伊豆の岬に、ちよと小さな點になつた。

濱に居るのが胡坐かいたと思ふと、テン、テン、テン、テン、テン、テン、テン、テン、波に丁と打込む太鼓、油のやうな海面へ、綾を流して、響くと同時に、水中に立つたのが、一曲、頭を倒に。

これに眩めいたものであらう、婀呀忌はし、よみ

ぢの（ことづけ）を籠めたる獅子を、と見る  
内に、幼児は見えなくなつた。

未だ浮ばぬ。

太鼓が止んで、濱なるは棒立ちになつた。

砂山を慌しく一文字に駈けて、此方が近いた時、  
どうしたのか、脱ぎ捨てた袴、着物、脚絆、海草の  
乾びた状の、あらゆる記念と一緒に、太鼓も泥草鞋  
も一まとめに引かゝへて、大きな渠は、砂煙を上げ  
て町の方へ一散に遁げたのである。

浪はのたりと打つ。

ハヤ二三人駈けて來たが、いづれも高聲の大笑ひ、

「馬鹿な奴だ。」

「馬鹿野郎。」

ポクノと來た巡查に、散策子が、縋りつくやう  
にして、一言いふと、

「角兵衛が、はゝゝ、然うぢやさうで。」

死骸は其の日終日見當らなかつたが、翌日しら／＼あけの引潮に、去年の夏、庵室の客が溺れたとおなじ鳴鶴ヶ岬の岩に上つた時は二人であつた。顔が玉のやうな乳房にくつついて、緋母衣がびつしより、其雪の腕にからんで、一人は美にして艶であつた。玉脇の妻は靈魂の行方が分つたのであらう。

然らば、といつて、土手の下で、分れ際に、やゝ遠ざかつて、見返つた時——其紫の深張を帯のあたりで横にして、少し打傾いて、黒髪の頭おもげに見送つて居た姿を忘れぬ。どんなに潮に亂れたらう。渚の砂は、崩しても、積る、くぼめば、たまる、音もせぬ。たゞ美しい骨が出る。貝の色は、日の紅、渚の雪、浪の緑。

0

【完】